

吉田健介さんの思い出

猪木慶治

吉田健介さんとはじめてお会いしたのは40年も前のことでした。彼がケンブリッジ大学の物理学科をご卒業後、イギリスで3番目に古い名門、ダラム大学で研究されていた時のことでした。私は1968年夏から1969年夏にかけての1年間、サバティカルイヤーでスイスのジュネーブにあるCERN（ヨーロッパ連合原子核研究機関）で研究生活を送っていました。ダラムでセミナーをした時、イギリス人の友人が言うには、「吉田健介という研究者がいて偉大な親戚がいるらしいけど、本人が絶対に口を割らないので何とか聞き出して欲しい」ということでした。そこで、セミナーが終わってから、健介さんと一緒にコーヒーを飲みながら雑談致しました。その当時の彼は最近と違って、何時も下を向いていてとてもシャイな感じでした。私は直感で答えを予想し、「君のお父さんは英文学者では？」と聞きました。「ええ」と小声で答えられました。「お祖父さんは外交官だった？」と聞きますと、また「ええ」と言われたので、次には「駐英大使だったね」とたずねると「ええ」と答えられ、短時間で答えを引き出すことができました。お祖父様がロンドンよりご帰国される際、お供をさせていただいたのが、私の義父夫婦だったという話をしましたら、とても打ち解けて話が弾みました。奥様のガブリエラさんとは、1974年、ロンドンでの国際会議のときにはじめてお目にかかりました。

それ以来、長いお付き合いで、いつ頃からか正確には覚えていませんが、毎年、秋一ヶ月ぐらい訪日されるようになりました。妹さんの暁子さんのところに泊まることのできるので気楽に帰国することができるとのことでした。サレルノからローマ大学にお移りになった頃からでしょうか、秋の一ヶ月ばかり、東京大学の素粒子論研究室に滞在していただくようになりました。とても活発に議論して頂きました。私が定年でやめ、私学へ移ってから、藤川さん、江口さん達と交流を深め、京都の二宮さんや川合さんのところへもしばしば、討論に行かれたり、一緒にお仕事をされていたと記憶しています。お嬢さんが10代の後半の頃、健介さんが連れてこられたときは、秋の研究室の遠足で皆で山登りをしたのも楽しい思い出の一つです。

8月初旬、駒場の理一で同じクラスだった友人の数学の飯高さんから藤川さん経由で健介さんの病状が思わしくなく、東京へ帰られて慈恵医大の病院へ入院されていることを伺い、お見舞いに行ってきました。その頃は、まだお元気そうで、2、3ヶ月前にご結婚されたばかりのお嬢様とご主人の幸せそうな写真も見せて頂きました。また、ご自分の身体のこととはかえりみず、ローマ大学では指導教授がダウンしたら、学生は悲惨になりますと、ご自分の3名の

学院生のことを気かけながら、ご自分を奮い立たせておられたのを思い出します。別室で、妹さんの暁子さんから、病状はよくなり、余り長くはないかもと伺い大変ショックでした。

最近まで、毎年、秋になりますと、活発なお声でご連絡下さり、また来年もお会いしたいなという思いに駆られていましたが、これからは、それもできなくてとても寂しい思いです。